



スーパー台風被災から約5年後の 復興状況について

—フィリピン共和国ビサヤス地区タクロバン市と近郊を再訪して—

広島文化学園大学看護学部看護学科

中 村 哲

はじめに

2013年11月8日、巨大台風ヨランダ（国際名称：ハイエン）がフィリピン共和国のビサヤス行政区 Visayas (Region VIII) を通過し（図1）、この地域におよそ7,400人の死者と、30,000人近い負傷者とほぼ同数の被災者を出す大規模被害をもたらした。この地域での被災直後の状況と疾病問題については「生存科学」に発表した（文献1）。筆者は今回、レイテ島を中心とした台風被災地域の水環境と住血吸虫症対策に係る文科省科学研究費を得て、被害が最悪であったレイテ島のタクロバン市と近隣地域を2018年2月と2019年3月に、約5年ぶりに訪れる機会が得られた。ここでは、タクロバン市地域と周辺地域の被災後の復旧に関する現状を報告する。

1. タクロバン市と周辺地域内の状況

タクロバン市の中心にあり、同市のシンボルであるサント ニーニョ Santo Niño 教会は被災直後、屋根全体を失い本当に見るも無残な状態にあった。にもかかわらず、暑熱とスコールの中、被災直後から避難所と祈りの場として機能していて、連日大勢の人々が詰めかけていた。今回の訪問で非常に嬉しかったことは、大聖堂が立派に修復され市のシンボルとして真に復活したことだった（写真1）。同教会の外観は白色に変わり、ステンドグラスも新しく変えられていた。写真2は2019年のある日曜の夕方のミサに訪れたおり、災害直後に国際緊急援助隊が診療 TENT を設置したりサール公園から撮影した。夜間の照明により市街域の著しい復興の象徴となっているように思われた。

都市のインフラと川のほとりはよく修復され、維持されていた（写真3）。タクロバン市の下水道はもともと完備されていないが、上水道が完全に回復しており、市内の食堂でも十分に塩素消毒が施された上水が提供されていた。市内の道路沿いには旧来のポンプ管井戸があちこちにあり、飲用ではないが生活用水として日常に利用されている（写真4）。同様の井戸はレイテ島内や隣接するサマール島の上水道未供給地域では主要な飲料水源となっている（写真5）。サマール島南部のパセイ市でも水源は地下水であり、台風被災直下での地下水は褐色に濁り、無数の大腸菌に汚染されていた。当時、同市の病院では幸いなことにタンクに溜めた雨水が使用されており大腸菌の汚染は見られなかった。現在この病院（写真6）では塩素消毒を加えた地下水が使用されている。レイテ島の中央部から山間地に向かうと、井戸や地下水をくみ上げた簡易水道もみられ、水質は菌も少なく比較的清潔なものであった。また、被災後に作られた簡易住宅も一部みられ、内陸部での被害も甚大であったことが窺えた（写真7）。

タクロバン市内に再び目を向けると、公共市場を含む商業施設の多くは修復され復興していた。被災によりほぼ全壊したタクロバン港近くの市場やバスセンター、空港施設は完全に復旧していた（写真8-10）。また市内ではすでに2つの新しいショッピングモールが建設されたことで、経済的にも回復し、急成長

なかむら さとし

〒737-0004 広島県呉市阿賀南 2-10-3 広島文化学園大学看護学部看護学科

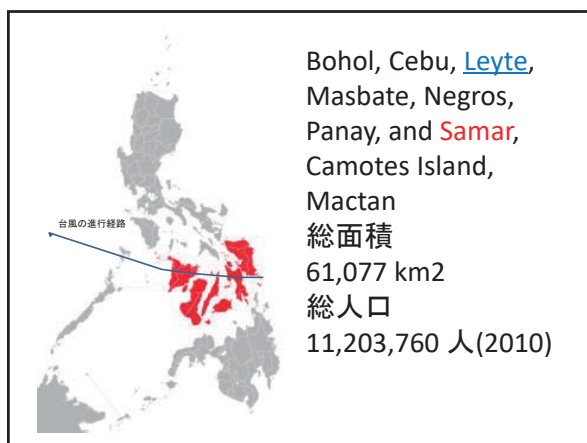


図1 フィリピン：ビサヤ行政区の主要な島とヨランダ台風の進路



写真1 右：2019年現在のサント ニーニョ教会
左：2013年被災当時



写真2 夕暮れのサント ニーニョ教会 2019年現在



写真3 右：2019年現在のタクロバン市内の小河川



写真3 左：2013年被災当時



写真4 タクロバン市中のポンプ付き管井戸の一例
2019年現在



写真5 左：2013年の被災当時（恵谷誠司氏のご好意による）



写真5 右：2019年現在のサマル島バセイ市内の管井戸



写真6 バセイ市の病院の外観と入り口 2019年現在



写真7 タガミ市近くの農村の簡易住宅の一例
2018年現在



写真8 左：2013年当時



写真8 右：2018年現在



写真9 左：2013年当時



写真9 右：2018年現在



写真10 左：2013年当時



写真10 右：2018年現在



写真11 新しいショッピングモールの一例 2018年現在



写真12 右：2018年現在



写真12 左：2013年当時

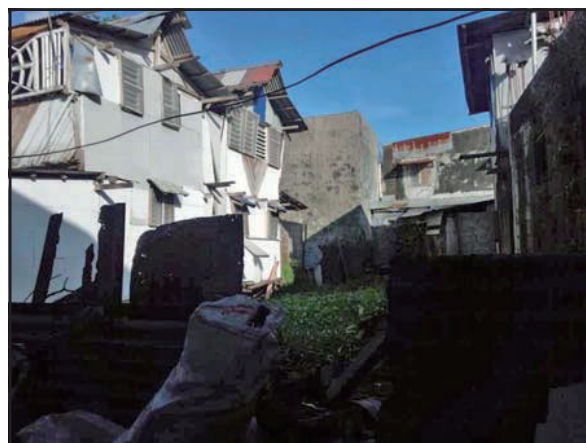


写真13 右：廃屋の例1



写真13 左：廃屋の例2



写真14 タナウアン市ブラクの事例 2013年当時



写真15 サマール島バセイ市近郊の事例 2018年現在



写真16 右：2018年現在の旧 EVRMC 病棟



写真16 左：2013年被災当時の同病棟

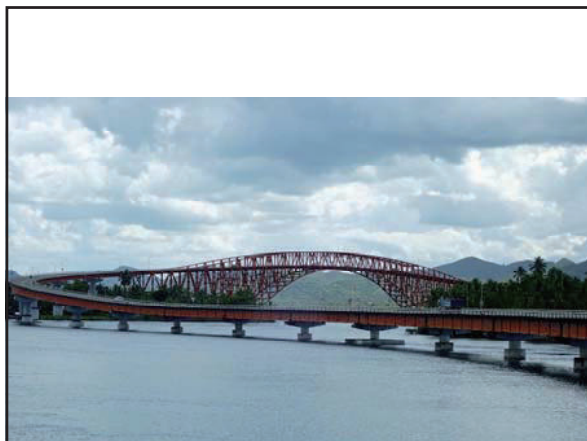


写真17 日本のODAで1973年に完成した橋梁
2019年現在



写真18 日本のODAで2017年に外来診療棟が完成
2018年現在



写真19 外来診療棟に隣接する主診療・病棟
2019年現在



写真20 RITM 分室：日本政府が1976年に寄贈した通称
ベシガン記念ラボの一室にある 2019年現在



写真21 SCRHの拡張された病棟と中央部に見える
旧事務棟 2019年現在



写真22 SCRHの研修センター入り口にて、右端がB.L. プラス先生 2018年現在

を遂げているように思われた（写真11）。そのうちの1つは、災害時に隊員が宿泊したホテルの近くにあったゴミ集積用の空き地に建設されていた（写真12）。他方、そのような再建の間、被災後に放棄された住宅や施設の建物が現在も残されている（写真13）。同市内の公的避難所に住んでいる人々が現在でも5,600人ほどいる。レイテ島の地場産業であるココナツプランテーションは巨大台風被災直後ほぼ壊滅状態にあった（写真14）。5年の後に新たなココナツヤシも順調に成長し地域でのココナツの生産も回復してきている（写真15）。しかし、現在希少な産品であるはずのコブラ（ココヤシの胚乳でココナツオイルの原料）の国際市場価格が低迷し、地場産業の経済的な回復は十分とは言えないことなどからも、まだまだ復興の途上にあると言える。

2. 研究協力施設である国立病院の状況

筆者の研究に関係するフィリピン保健省 Department of Health (DOH) の東ビサヤ行政区中央病院 Eastern Visayas Regional Medical Center (EVRMC) および住血吸虫症予防研究病院 Schistosomiasis Control and Research Hospital (SCRH) の現状について少し紹介したい。

前者の EVRMC は第12回アジア・パシフィック災害医学学会で知遇を得た共同研究者 Dr. Lory Labatos-Ruetas が所属する災害対策部 Section of Health Emergency Management があり、1000の病床を有し、三次医療を担う行政区の中核病院の1つである。筆者は2013年の被災直下に初めて訪れた。同医師によれば被災当時病院はすぐそばが海であり、波高6mの破壊的な高潮と平均風速80m/秒の暴風雨により壊滅状態となり、その後の診療は辛酸を極めていた。今回2018年に訪れたとき建物施設は診療機能、病棟施設とも復旧していた（写真16）。現在 EVRMC は、新たな病院施設をレイテ島とサマル島を結ぶサンファニーコ橋（写真17）起点付近のタクロバン市 Bagacay 地区に建設中である。その内の新外来診療棟は国際協力機構（JICA）の支援により2017年に完成し、筆者が翌年同院を再訪した折にはすでに稼働していた（写真18）。同病院施設全体は2019年中に完成し、全診療科が新地区へ移転する予定と聞いている（写真19）。

後者の SCRH はタクロバン市に隣接し、内科および小児科、産科、外科の4療科と100病床を有している。フィリピンで初めて住血吸虫病の流行地として認知されたパロ市にあり、その疾患の予防と研究に係る施設が前身である。そこでは1972年から1982年まで日本の府開発援助（ODA）による住血吸虫症研究および対策プロジェクトが JICA により実施され、研究施設と病棟が設立された（文献2）。そして、その後もこの施設を通じて日本の NPO や研究者が同疾患対策に支援を続けてきた経緯がある（文献3）。台風被災下の施設は見るも無残であったが、現在では研究面ではフィリピンの先端医療研究機関の一つである熱帯医学研究所（RITM）の分室が作られ中央との連携も行われつつある（写真20）。また、診療面では現在病棟が拡張され、住血吸虫症対策に加えて母子保健医療が強化されてきている（写真21）。2018年の同病院の訪問では筆者の専門であるアジアの住血吸虫についての講演を行うことができた。また、そこではフィリピンの住血吸虫症研究と対策の大家であり、尊敬する B. L. Blas 博士（写真22）より、研究の集大成の書籍を大学院時代の恩師への分と共に寄贈いただき、大変感激した。

日本政府は ODA によりフィリピン政府に対して日本緊急援助隊の派遣の他、2014年2月から2016年8月までの間、被災地のインフラ整備のためのプロジェクト（<https://www.jica.go.jp/oda/project/1303201/index.html>）による大規模支援を行ってきている。筆者は微力ながら今後できる限り、フィリピンに関

わられた諸先輩に続き住血吸虫症対策研究に関与していく所存である。

謝辞：

フィリピンでは Dr. Lory Labatos-Ruetas, Chief of Section および Ms. Cecilia Chua, Staff of Section of Health Emergency Management, Dr. John E. M. Coloma, Former Hospital Chief of EVRMC, Dr. Salvador Evardone, Chief of EVRMC, Dr. Amelita Avenido, Former Hospital Chief of SCRH, Dr. Lyn Verona, Hospital Chief of SCRH, Ms. Emelda Legaspy, Training Section of SCRH, DOH, Prof. Dr. B. L. Blas, 茨城県立中央病院 金子昌弘看護師, 大竹英博先生に大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。また分担研究いただいた翠川裕先生および, ご助言と支援いただきました東京大学名誉教授 田中寛先生, 国立感染症研究所 二瓶直子先生, 鈴鹿大学 翠川薫先生, 山形大学 渡部徹先生, 広島文化学園大学看護学部の先生方各位, 毛利カリーナ先生に感謝いたします。また, ここに掲げた写真の一部を提供くださった恵谷誠司先生, 村上勉先生, 山梨中央病院の井上潤一先生をはじめとする2013年派遣国際緊急援助隊2次隊隊員各位に深謝いたします。そして, 故松田肇先生の霊にこの小文を奉げます。本報告は文部科学省科学研究費挑戦的研究(萌芽)課題番号17K19855に負うものです。

文 献：

1. 中村 哲: 台風災害と感染症を考える: 2013年の台風ヨランダによるフィリピンでの災害を事例として. 生存科学 25(1), 89-108, 2014.
2. 国際協力事業団医療協力部 「フィリピン国住血吸虫症研究対策プロジェクト アフターケア協力調査団報告書」17頁, 昭和58年8月.
3. 中村 哲, 二瓶直子, 翠川 裕: フィリピンにおける日本住血吸虫症とその対策に関わる研究ノート. Bio Clinica 34 (12) 79-84, 2019.